

牧師所感： 全身麻痺の詩人の母親

— 星野 富弘・水野 源三 —

2024年5月12日は母の日であった。日本では母の日を祝日として祝うことはないが、キリスト教界では祝日として、お祝いする日である。

ところが韓国ではこの日を祝日として休むのである。キリスト者が多い国であるからであろうか。日本でもキリスト教会では、この日を母の日としてお祝いする。

先々週は5月12日で、母の日の由来を牧師所感に掲載した。殆どの人がその由来を御存知であろうが、念の為、もう一度掲載する。

1907年、アメリカ在住のアンナ・ジャービスは亡くなった母のために追悼会を開き、母が生前好きだった白いカーネーションを参列者に配った。この日が母の日の制定となった。時を経てアンナ・ジャービスの死後、その娘のアンナによって祝日となり、1914年にウッドロー・ウィルソン大統領によって国民の記念日となったのである。

さて去る5月12日の母の日には、星野 富弘 詩人・画家の母について書いた。星野氏は事故によって首を痛め、全身麻痺となり絶望に瀕していた。彼は母の苦労について「神が一度だけこの腕を動かして下さるとしたら、母の肩をたたかせてもらおう。」と母の愛を詠んだ。

以上が 星野 富弘（口に筆をくわえて詩・絵を画く）氏の活動である。

さて5月12日の母の日には、水野 源三 氏の母親の御紹介を抜きにすることは出来ない。

水野 源三 氏は1937年1月2日、長野県 埴科郡 坂城町に生れる。'46年 坂城町に発生した集団赤痢に罹患。高熱による脳性麻痺で首から下とことばの自由を失う。12才の時、絶望に打ち拉がれている時、宮尾 隆邦 牧師の慰めの伝道によってキリスト者になり、以後召天（'84.2.6）されるまで生を全うした。

彼は47才で召天したが、生を終えるまで信仰を持って闘病した。

ところで、彼の短い生涯において、彼の母親の愛情の献身を抜きにしては語れない。彼の母うめじ様は五十音表を使わせて、源三の瞬きを字に替えて、詩を詠むように導いた。それで源三氏は数多くの詩を詠んで信仰を表わした。彼は生涯、詩集四冊を発行した。

さて、筆者は若い時、彼の詩を歌に、教会で、集会でよく歌った。筆者が歌った詩をここに掲載する。

もしも 私が苦しまなかったら 神様の愛を知らなかった

もしも 多くの人が苦しまなかったら 神様の愛は伝えられなかった

もしも 主イエスが苦しまなかったら 神様の愛はあらわれなかった

おわりに、今日 水野 源三さんの詩が再評価されていると言う。神様に 栄光！！